

再定義の時代の国語科教育と現代文学史

野中 潤

一、深める力と文学

二〇一八年六月十六日に東京女子大学で開催された昭和文学会春季大会の基調講演「台湾日本語文学会と、台湾の日本文学研究」で、台湾における外国語教育の歩みが俎上に載せられた。輔仁大学の頼振南教授によると、それぞれの時代にどのような技能の育成を目指してきたかという観点から整理すると、日本統治時代の「聞く」「読む」が、「聞く、読む、話す、書く」の四技能になったのが一九六〇年代。一九八〇年代後半には、そこに「訳す」という技能が加えられた。さらに近年になって、第六技能として「動く」、第七技能として「深める」が加わったという。

日本の国語科教育および英語科教育においては、「聞く、読む、話す、書く」の四技能に整理するのが通例なので、「訳す」「動く」「深める」という三つの「技能」を加えるという発想には、少なからず意表を突かれるところがある。一方で、

四技能の整理では取りこぼされてしまいがちな国語科教育の可能性に、改めて気づかせてくれるようなところもある。

たとえば、「訳す」という技能を念頭において時に浮上してくるのは、外国語を母語に訳すということだけではないし、古文を現代語に訳すということだけでもない。書き言葉を話し言葉に訳すとか、敬体を常体に訳すとか、専門的な表現を一般的な表現に訳すとか、大人向けの文書を子供向けに訳すとか、既存の注意書きを外国人にも伝わるような「やさしい日本語」に訳すなど、「訳す」という営為には多様性がある。これに加えて、マンガを物語に訳すとか、映画の一場面を小説に訳すとか、暗黙知となっている日常的な所作を言語化するとか、さまざまな領域を越境するための「訳す」技能を、国語科教育の学びに織り込むことができる。

「動く」という技能には、「言語活動の充実」とか「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の視点から

の授業改善」といった昨今さかんに議論されてきたフレーズと響き合うものを見出せる。試みに国語科教育の文脈にあてはめてみれば、身体的に「動く」ことによって他者との物理的な距離を縮めた上で「話す」ことができるかどうか、新たな情報を入力するために保管場所や提供者のもとに「動く」ことが出来るかどうかなどの形で具体化することが出来る。電子メールやSNSでのやりとりだけではうまくいかなかった対話を実りあるものにするためには、ときに交通機関を使って相手のいる場所まで物理的に「動く」ことが必要になる。児童生徒の日常に寄り添って考えれば、席を立って教卓まで行って教員の前に立つことや、教室から職員室まで歩いて行ってドアを開けることなどの「動く」というプロセスがあつて初めて、「話す」「聞く」といった他の技能を活用する可能性が開ける。もちろん、物事を判断している立ち位置から「動く」ことによってこれまで見えていなかった叙述の構造を「読む」ことなどのように、既存の技能に即して位置づけることもできる。いずれにしても、「動く」という技能を念頭に置くことで、教室の座席で教科書や黒板を「定点観測」しているだけの「聞く、読む、話す、書く」とは異なる、動的な言語活用の姿が浮かび上がってくることは確かである。そして、これらの技能が、ときに「実社会」で生きていくために死活

的に重要な技能となり得ることは、誰しも否定できない現実である。かりにそれが分身ロボットやホログラムであったとしても、身体の像をその場に出現させて非言語的な情報を共有することによって、人の心が動き、そこに意味や価値が立ち現れる。だからこそ、物理的に移動することが困難な人にとって、分身ロボットOrTime（オリヒメ）を使って会いたい人の「すぐそばに立つ」ことが渴望の対象になり得るのだ。では、「深める」というのは、いったいどのような技能なのだろうか。また、「深める」ことによって実現する「深い学び」とは、どのような学びの姿なのだろうか。

中央教育審議会答申（平成二八年一二月）では、「知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう」ことが、「深い学び」であるとされている。「知識―深い理解」「情報―考えを形成」「問題―解決策」「思いや考え―創造」という構図が列挙されているのだが、これらの構図の共通項を「深い」という概念に即して抽出すれば「構造化」ということになるだろう。具体的な「知識」を関連づけて構造化することが「深い理解」につながり、複数の「情報」を分析し構造化することが「考えを形成」することを可能にする。さまざまな現象が

ら「問題」を抽出する営為にも、その問題を解決するためにはさまざまなリソースを組み合わせて現実社会に働きかける「解決策」へと結実させるプロセスにも、「構造化」は必要である。もちろん、「思いや考え」を基にした文章表現やプレゼンテーション、動画などを「創造」するためにも、異なるレイヤーの事象を結びつけることによる構造化は不可欠である。つまり、「深める」技能は、具体的な知識を組み合わせることでより高次の概念的知識へと昇華させたり、習得した知識を活用して情報発信や課題解決などの行動へと結びつけたりする学習活動において、知識を多層化し構造化するという形で発揮されているはずなのだ。

このような「構造化」の契機は、多層化されたネットワークの中で個々のデータに含まれる特徴を段階的に学習することで実現されるというディープラーニングの技術と類比的なものである。また、小説というジャンルの多声性に對しても類比的である。もちろん、映画ないしは動画、美術や音楽なども、多層化された場を遷移しながら受容することで「深める」ことを可能にする文化的な営為であると言える。

二、N高校と学校教育の再定義

創立四年目を迎えたN高等学校の生徒総数が、ついに一万

人を超えたという噂である。年間を通じて編入者がいる一方で、中途退学者はきわめて少なく、年度内に一万二千人を超えると思われている。平成三十年版「文部科学統計要覧」によると、高校生の総数はおよそ三二七万人だから、今や全国の高校生のおよそ三〇〇人に一人がN高生であるという計算になる。マスメディアが取り上げるようになったとは言え、まだまだN高の存在を知らない人も多いはずで、多くの日本人にとってかなり衝撃的な数字ではないだろうか。いや、すでにN高のことを知っていたとしても、創立四年目で高校生の三〇〇人に一人がN高生になってしまっているという現実が衝撃的であることに変わりはない。同じような生活習慣や行動様式、同じような服装や髪型を規則として強制され、全員一律の宿題や一斉授業が当たり前になっている既存の学校教育に飽きたらない生徒たちが、大挙してN高等学校の門を叩いているのである。

二〇一六年四月に「ネットの高校」としてスタートしたN高等学校は、広域通信制高校の制度を活用して、既存の教育制度に適応できないタイプの生徒たちの可能性を最大限に伸ばそうとしているところに特徴がある。起立性障害で決まった時間に登校することができない生徒でも、自分が起床できる時間から一日をスタートさせ、自宅の情報端末の前に一

二時間すわって課題をこなせば、学習指導要領が定めた教科教育の内容をひととおり履修して単位を認定してもらうことができる。不登校と呼ばれる生徒たちも、スクーリングが必要だとは言え、基本的には自宅にいながらにして高校卒業の資格が取れる。難関大学への進学を目指しているが、地元の全日制普通科の教育では自分の力を十分に伸ばせないと考えている生徒は、N予備校でネット配信されている授業に参加し、リアルタイムで教員とやり取りをしながら学力を伸ばすことができる。スポーツに秀でた生徒は、プロフェッションルとして練習に多くの時間を割き、長期間にわたる海外遠征をしながら高校の卒業資格を得ることができる。ダンスレッスンをする生徒もいれば、音楽スタジオに通う生徒もいる。プログラミングに夢中になる生徒やeスポーツに没頭する生徒もいる。フィギュアスケートでグランプリファイナルを制覇した紀平梨花選手や囲碁棋士で第43期新人王戦となった広瀬優一三段など、自らの進むべき道が明確な高校生であれば、好きな場所で最低限の課題をこなした後は、自分がやりたいことに存分に取り組むことができるのだ。「不登校」「発達障害」「変わり者」「規格外」「非常識」「素行不良」などのレッテルを貼られかねないような生徒たちが、自分の居場所を見つけ、自尊感情を取り戻し、より良い未来を切り開く可能性

を手に入れつつあるということは、本人にとっても社会にとっても望ましいことである。

もちろん、ネットで遠足をするとかネットで部活動をするなど話があるので、自分が体験した教育を正当化し肯定したいという気持ちに動かされると、「ほんとうの遠足」や「ほんとうの部活動」という物語を対置して、N高校の教育活動を卑下するような物言いをする向きもある。端末を操作するだけで単位が取れるのであれば、形だけ課題をこなして自宅で不摂生な日々を過ごすだけであったり、拝金主義的な職場でブラックな労働に忙殺されたり、大人から見てもあまり望ましくない生活を送る生徒がいるかもしれない。ネットでお手軽に効果的な教育が実現できるという物語を、そうそう容易に信じるわけにはいかないのだ。N高校側もそういうまなざしがあり得ることを十分に承知していて、マタギや刀鍛冶やイカ釣り、宿坊、酪農、マグロの仲卸など、リアルな場での学びの機会を作ることにも腐心している。そういう努力が実を結んだということもあるのだろうが、N高等学校が公表している二〇一九年の「生徒・保護者アンケート調査」によると、ネットコースの生徒の総合満足度は上期が七九・三%、下期が八三・二%であり、保護者の総合満足度は八三%、不登校経験者の進路決定率は七七%にも及んでいる。さらに注

目すべきは、「N校生であることに誇りを持ってますか？」という問いに対して四一・八%の生徒が「はい」と答えているということだ。「いいえ」が一〇・一%、「どちらでもない」が四人・一%であるという数字と合わせて考えても、通信制高校に対するネガティブなイメージを払拭するような教育が具現化していることがうかがえる。「ネットの高校」という言葉から、ともするとネガティブな先入観を持つ人もいるようだが、学校に適応できないコミュ障の生徒だけがN高校を選択するわけではない。たとえば、真夜中に出港するために普通の高校生にとっては苦行でしかないイカ釣りという仕事の場で、起立性障害の子が最も生き生きと活動し、自分の心身にびつたりの仕事が存在していることを知ること、自尊心を取り戻したという美談などを聞くにつけ、そもそも一人ひとり別々の個性を持った生徒たちを、「適応」させるとはどういうことなのかを考えさせられる。批判されるべきなのはむしろ、「ほんとう」を前に立て、「普通」に適応することを強いる教育を自明のものとし、慣れ親しんだものとは異なるN高校の学校教育を「にせもの」として否定する言説の方なのだ。たとえば、生身の肉体と鍛え上げられた筋肉を使わないeスポーツは、「ほんとう」のスポーツではないとするロジックを肯定してしまえば、それはパラスポーツをスポー

ツから切り離すロジックと地続きである。「全日制普通科」的なマジョリティーの世界で育ってきた者が、三〇〇分の一というマイノリティーの学び方、生き方を許容することができないとすれば、それはいつたいなぜかということを、むしろあらためてじっくり考えるべきである。

三、映画「ニューヨーク公共図書館」をめぐる

フレデリック・ワイズマン監督のドキュメンタリー映画『ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス』（二〇一六年）が岩波ホールなどで劇場公開され、連日多くの熱心な観客を動員した。三時間半以上にわたる長いドキュメンタリー映画が問いかけているのは、言わば「図書館の再定義」とも言える現在進行形のクリティカルな出来事である。本館を含む九二の図書館の集合体であるニューヨーク公共図書館は、書籍、映画、演劇、アート、ダンスなどの豊富なコレクションを収蔵して市民に提供する通常の業務のほかに、コンサート、就職フェア、パソコン講座、住宅手配サービス、ダンス教室、図書館ディナーなど、多種多様な教育プログラムや成人教育を提供するコミュニティーセンターとしての役割を果たしている。さらに、スマートフォンなどの情報端末を十分に使えない階層の市民のために、モバイルミュージアの貸し出し

をも行っているのだ。

もちろん日本の図書館にも、コミュニティセンターとしての機能はあるわけで、オープン一三五日で来館者一〇〇万人を達成した神奈川県「大和市文化創造拠点シリウス」などは、その象徴的な存在であると言えるだろう。ただし、日本において図書館とは、「図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設」(「図書館法」第二条、一九五〇年制定)である。そのため、インターネット上に膨大な資料や記録や情報が流通し続ける現代社会に、十分に対応しているとはいえない憾みがある。一般的には、「ゲームやメール発信・掲示板への投稿」を禁じたり、「一日最大一二〇分以内」(京都市立図書館)、「一回三十分、一日二回まで」(小平市図書館)などと利用時間を制限したり、きわめて抑制的である。なかには端末を二台しか用意していないせいとか、「一回十五分以内」として椅子は置かず利用者に立ったままで閲覧することを強いている図書館すらある。アメリカにおいては、「図書館は、今日および歴史上の諸問題について、さまざまな観点にたつ、すべての資料および情報を提供すべきである。資料は、党派あるいは主義の上から賛成できないという理由で、締め出され、

または取り除かれることがあってはならない。」(「図書館の権利宣言」Library Bill of Rights、日本図書館協会図書館の自由に関する調査委員会訳)と考えられているから、ウェブ上のものであったとしても閲覧(ブラウジング)に不必要な制限を加えるような対応を取ることは、図書館の定義に反する。日本においても、情報端末でネットサーフィンできる図書館が増えつつあるが、図書館がモバイルメディアを貸し出すことでデジタルデバイドを軽減しようとしているアメリカとの隔たりは大きい。日本では、公共施設内のメディア整備ですら、今のところなかなか難しい。

しかし、公共施設内にウォータークーラーが置かれていて無料で安全な水が飲めるように、安全な通信環境を整備することは、生存権に関わる重要な課題であるとすら言える。たとえば、就職活動を成功させるためには、情報端末が必須のものとなっていて、SPIとか玉手箱などというウェブテスト受けることが一般的になっている。モバイル端末を適切に使えなければ、迅速に情報収集をしたり情報交換をしたりすることもできない。ニューヨーク公共図書館がモバイルメディアを貸し出すのも、スキル向上や職探しなどによって困窮している人びとの生活の質を担保するために、デジタル情報への日常的なアクセスが必須であると判断しているからなの

だ。あらゆる「資料および情報 (materials and information)」を提供することを旨とする「図書館の権利宣言」の条文が指し示しているものは、もはや紙媒体としての書物だけではないはずなのだ。ついでに言えば、これは、Wi-Fiだけの話ではない。大学を含む公共施設が、利用者に通信機器の給電や充電をさせないのは、手洗いや水分補給のために水道水を利用することを制限するのと同じくらいに理不尽なことであると考えるべきである。災害時に避難施設で電気や通信環境が優先的に提供されるのであれば、日常においてもそれらは基本的な社会インフラとしてあまねく提供されるべきである。コンセントが足りなければ、むしろ増やすべきであり、中学や高校の校舎にも駅の待合室にも、空港のラウンジにあるような充電設備を用意すべきなのだ。

四、Youtubeの出現と図書館の再定義

都留文科大附属図書館長として参加した公立大学図書館協議会において、ホームページ上にも公開されている加盟館の名称を眺めていて驚いた。たとえば、公立はこでて未来大 学情報ライブラリー、横浜市立大学学術情報センター、福知山公立大学メディアセンターなど、「図書館」という単語が含まれない加盟館が少なからず含まれていたのだ。近年設立

された大学の中には初めからそのような名称だった加盟館があるのかもしれないが、組織再編等によって名称が変更されたと推測されるものが多い。こうした状況が示唆するのは、「図書館の再定義」とでも呼ぶべき問題である。

文字や紙や活版印刷の発明によって登場した書物というメディアが、知識や情報の記録、共有や伝達等の機能を飛躍的に拡大させてきたことで、市民革命や産業革命が可能になった。しかし、二十一世紀の今日、新しいテクノロジーの登場によって、知識や情報の記録、共有や伝達等の質と量は、紙で印刷製本された書物によるものとはまったく別次元の領域に移行しつつある。こうした現実が、人間や社会が市民革命や産業革命に匹敵する構造的な変化をともしう可能性を孕んでいることは、容易に想像できることである。キャッシュレス決済や仮想通貨の広がりということ一つを取っても、貨幣が登場し、紙幣が兌換紙幣から不換紙幣に変わったこと以上に、マネーというもののありようを根本的に変容させる可能性を持っている。AIやロボット、IoTや5G（第5世代移動通信システム）の登場など、テクノロジーの変化が、経済構造、社会構造に根本的な変容をもたらしつつあるのだ。そして、こうした状況の中で、デジタルデバイスと呼ばれるような情報リテラシーやリソースの格差が、社会の分断や悪

しき階層化を生み出していることは、否定し難い現実である。だからこそ、公共図書館の使命として、今日および歴史上の諸問題についての、あらゆる資料や情報に触れることができるように、情報端末によるウェブ世界へのアクセスを広範な市民に提供する必要があるのだ。

YouTubeのCEOであるスーザン・ウオジスキーが「YouTubeは現代の巨大な動画版図書館である」と言っている。やや突飛な見解に聞こえるかもしれないが、図書館の起源や図書館の基本的な機能を考えると、むしろ卓見と言わべきである。一般的に図書館の歴史は、紀元前七世紀にメソポタミアのニネヴェにあつたアッシュール・バニバル王の図書館や紀元前三世紀のアレクサンドリア図書館から語り起こされることが多い。しかし三万点を超える文書記録を収蔵する王立図書館が突如出現するとは考えにくいし、アレクサンドリア図書館の出現にはさまざまな文書保管所の前史があつたと考えられている。文字とそれを記録する媒体（粘土板、パピルス、羊皮紙など）の発明によって文書が作られるようになった直後に、それを保管する営為は始まったはずである。あるいは、岩壁や洞窟内部に文字や絵を書き、そこに誰かがやってきて読む（見る）というような出来事の中に、図書館的な存在の萌芽があるとも考えられる。納本というと、何千部、何万部

というオーダーで発行された書物の中の一冊を図書館に納めるものであると考えてしまいがちであるが、複製技術が発達していなかった時代は、書き上げたオリジナルテキストそのものを納めるという行為こそが、「納本」であつたに違いない。現代において弁別可能な公文書や日記や手紙、単行本や雑誌といった文書の種類も、粘土板の時代には曖昧模糊としていたかもしれない。ジャンルが生成する以前の、原初的なエクリチュールの世界における図書館の姿を想像すれば、それはまるで無料の動画をたくさんクリエイターが自由に投稿するように、誰でも読める場所に文字や絵を書いて「納本」とするという営みだったかもしれないではないか。だとすれば、アッシュール・バニバル王の時代の図書館と現代の巨大な動画版図書館であるYouTubeは、構造的にそっくりなのだ。提供すべき「書物」を保管しておく場所という静的な機能としてではなく、あらゆる「情報」や「叡智」に自由にアクセスできる場所という動的な機能として図書館を再定義するならば、「動画面」という限定を外し、「YouTubeは図書館である」という言明すら可能である。逆上がりのコツ、ロープの結び方、単振り子の周期、英語プレゼントークのコツ、天ぷらの作り方、プログラミング、鮎の塩焼きの作り方、ブラックホール、火起こし術、「羅生門」の魅力、騎馬戦のコツ、色彩

検定などなど、じつにさまざまな人類の叡智が動画でわかりやすく共有されている。しかもすべてのコンテンツは無料である。インターネットに接続された情報端末さえ持っていれば、誰でも、いつでも、どこでも、知りたいことを調べ、学ぶことができる。もちろん中には誤った情報も含まれているわけだが、それは紙に印刷された情報でも同じことである。紙の書物だから正しいわけではなく、YouTube動画だから間違っているわけでもない。紙の書物であれ、YouTube動画であれ、利用する人間が、いかに情報の妥当性を担保するためのスキルを身につけるか、また、より多くのユーザーによる検証可能性の中でその妥当性を鍛え上げていくかということが問われるという点では、どちらも同じなのだ。そして、デジタル情報として広く公開され、検証可能性の中に開かれている情報は、理屈の上では紙媒体よりもむしろ信頼性を高める可能性へと開かれている。たとえば、研究領域が蝸壺化する中で、査読という制度が十分に機能しなくなりつつあることを考えると、ブロックチェーンのようなシステムの中に研究論文というデータを存在させた方が、論文の価値を評価し、研究を前進させる上でおそらくはるかに効率的・効果的である。

五、文学の再定義

YouTubeが現代の巨大な図書館だとすれば、果たしてそこに文学は収蔵されているのだろうか。

図書館の再定義にならない、文学の再定義という思考実験をするなら、「文学」もすでにその姿を変容させつつあると言えるのかもしれない。そもそも記紀万葉時代の「文学」と平安朝の「文学」、鏡物時代の「文学」と並べた時に、それらを同じ「文学」として扱うという手つき自体が怪しい。これに、版本が流通した読本や草双紙の時代の「文学」や、島崎藤村や田山花袋、志賀直哉や谷崎潤一郎、中原中也や太宰治などが活躍した時代の「文学」を加えてみれば、なおのことである。そもそも記紀万葉時代の「文学」は原本が残されておらず、文字としてよりもむしろ声として共有されていたのだろうから、内容においてのみならず、その物理的な形態や享受のあり方自体が現在考えられている「文学」とは異なるものであったはずだ。また、毛筆で紙に書き綴られた文字として、あるいは絵画をとまなう絵巻物として存在していた「文学」と、大量に印刷複製されたインクのみみとして流通するようになった「文学」との間にも、さまざまな位相における差異を見出すことができる。『校注古典叢書 源氏物語 新装版』（明治書院）を紫式部に見せたら、果たして自分が

作った物語であることを認めてくれるだろうか。縦書きの文字を横書きに変えるのと同じぐらい、あるいは考えようによってはそれ以上の大幅な変化がほどこされている。形式上、形態上の変容の大きさを考えると、そもそもそれが書物であることをただちに認識することすら困難であるかもしれない。そして今や「文学」は、ディスプレイ上で明滅する光であると同時に、スピーカーを通じて響く音として、身体を持つ人間の声を通じて共有された文学のプリミティブな姿を包摂する新しい形態を獲得しつつある。「文学」の歴史をたどってくれば、こうした事態の中に「文学の再定義」を見て取ることができる、さほど突飛な話ではないのだ。

繰り返し多くの人びとに受容され得る強度を持つ、まとまった言葉のつらなりを、仮に「文学」と呼ぶことにする。同様に、繰り返し受容するに足る強度を持つまとまった音のつらなりを「音楽」と呼ぶことができる。そして、繰り返し受容するに足る強度を持つ言葉のつらなりと、同様の強度を持つ音のつらなりがあいまって「うた」が生成する。「うた」は「文学」の原初的な形態である。活字体のインクのシミを黙読して生成する世界が、制度化された「文学」を成立させたわけだが、それは原初的な「うた」に始まる広義の文学の中にあっては、言わば「異形の文学」である。そもそも文学

は、さかのぼれば「声」なのだから、本よりも動画の方が「文学的」だとすら言えるはずなのである。

一九七八（昭和五三）年から次々に発表した一連の論考をまとめた『日本近代文学の起源』を柄谷行人が上梓したのは、一九八〇年のことだ。日本近代文学に〈起源〉があるということは、いずれは〈終焉〉が訪れることを示唆する。かりに「近代」という語を「現代」という語に置換して延命を図ったとしても、いずれ〈終焉〉が訪れるという事態に変わりはない。「近代」という時代の後にやって来た「現代」という時代を、「現在」という時間に紐付けて常に「現代」という時制を更新し続けたとしても、「日本」や「文学」が変容し、〈終焉〉を迎えるという事態を永遠に回避することはできない。たとえば、日本近代文学の歴史を振り返る際に「日本語文学」という眼鏡をかけるだけで、「日本文学」という概念の輪郭が揺らぎ始めることは、研究者にとってはほとんど常識である。現代と呼べる時代に目を向けても、多和田葉子、リービ英雄、楊逸、田原、アーサー・ビナードなど、「日本文学」なるものの自明性をゆさぶる文学者たちは数多い。「日本文学」の成立を下支えしていた「教養」の輪郭も揺らぎ始めている。少なくとも一九八〇年代までは、「大学生のうち」に岩波文庫と岩波新書を全部読みなさい。そうすれば、

文学を学ぶための基本的な教養が身につくはずだ。」というような言明が効力を持ち得た。しかし今となつては、そのような言明は絵空事に過ぎない。岩波文庫だけでも、刊行点数は六〇〇〇を超えていて、今でも毎月何冊もの新刊が刊行されている。岩波新書や岩波現代文庫や他社の文庫本の中にも必要な「教養」を身につけるための出版物は数多くある。さうから、とうてい生身の人間に読破できる量ではない。当然のことながら、文芸雑誌を読んでいるだけでは「文学」をよりよく享受することは覚束ないが、文芸雑誌を毎月読破するほど暇な人はごく稀にしか存在しない。出版コストが下がり、電子書籍が流通するようになったことで、これまでも増して膨大な量のテキストが生産され続けている。半年ごとに芥川賞作家や直木賞作家が生まれているし、毎月発売されるライトノベルだけでも一〇〇冊をはるかに超えている。古典を読破し、新しい「文学」をフォローすることすら、今や生身の人間には不可能なレベルに達しているのだ。もちろん、出版物を読むだけでは「文学」をより良く享受するための教養として不十分である。ジブリアニメやクロサワ映画を一本も見たことがないということでは、文学を学ぶための基本的な「教養」の持ち主とはとうてい言えないだろう。必要な「教養」を身につけているかどうかのチェックするために、「仮

名手本忠臣蔵を観たことがあるか」「ドストエフスキーを読んだことがあるか」「宝塚のベルサイユのばらを観たことがあるか」「演劇集団キャラメルボックスの芝居を観たことがあるか」「新海誠のほしのこえを観たか」「クレヨンしんちゃん劇場版を見たことがあるか」「マーベル映画を観たことがあるか」「進撃の巨人を読んだか」などといった項目をリストアップしていくとしたら、延々と作業が続くことになるだろう。こんな状況に置かれている時代にあつて、「教養」とはいったい何なのだろうか。

アニメやお笑い番組に耽溺していたテレビっ子世代である昭和の子が、YouTubeを視聴し続ける令和の子供たちを否定することはできないし、文豪の小説よりもマンガ雑誌をたくさん読んだ世代が、読書よりもスマホでアニメやゲームに興じる世代を否定することはできない。また、それらの中に「文学」が存在しないと断定することもできない。仮に二葉亭四迷の「浮雲」から数えれば、たかだか一三〇年ほど続いているに過ぎない日本近代の「文学」の姿だけを「文学」であると考えるのは、あまりにも不遜な態度である。「現代文学史」を構想するとすれば、そもそも人間にとって「文学」とは何であるのかを再定義することが必要な時代なのである。

(のなか・じゅん)